

瓜生堂遺跡試掘調査報告書

——都市計画道路大阪瓢箪山線の建設事業に伴う瓜生堂遺跡第44次調査——

1997. 3

財団法人 東大阪市文化財協会

本文目次

1. 調査に至る経過.....	1
2. 試掘結果.....	4
【A・B地区】.....	4
【C・D地区】.....	11
【E地区】.....	11
3. まとめ.....	11

挿図目次

図1 試掘地点位置図(1/2,500)	3
図2 周辺遺跡分布図(1/25,000).....	3
図3 A地区西壁断面図.....	4
図4 北北西に向かって流れる河川の堆積.....	5
図5 A地区西壁断面下部.....	5
図6 SE01・02・03検出状況(北から).....	6
図7 SE01・02・03平面図.....	6
図8 SE01内出土遺物.....	7
図9 SE03(北東から).....	7
図10 SE02(北から).....	8
図11 SE02実測図.....	8
図12 SE02内出土遺物.....	8
図13 SE02に使用された瓦の接合状況とその内訳.....	9
図14 SE02に使用された瓦の大きさ	9
図15 SE02の井側に使用された瓦.....	10
図16 C地区北壁断面図.....	12
図17 C地区西壁断面.....	12
図18 C地区北壁断面.....	12
図19 D地区北壁断面図.....	13
図20 D地区作業風景(南東から).....	13

1. 調査に至る経過

瓜生堂遺跡は、昭和39年に府道大阪中央環状線内で行われた工業用水道埋設工事の際に、多量の弥生土器が出土したのを契機とし、統いて行われた第二寝屋川開削工事において弥生時代中期の木棺群や前期の集落跡及び土器・石器・木器・骨角器等の多量の遺物が出土したことなどによってその存在が知られるようになった。工事中の発見であったが、出土資料により遺跡の内容があきらかになるにつれて、遺構・遺物の種類の豊富さと、地表下4mの沖積層内に埋没することによる良好な遺存状態は從前知られている弥生遺跡に類をみないものであることが判明し、大阪府教育委員会と東大阪市教育委員会を中心にその後の大規模工事に伴う発掘調査体制の速やかな整備が検討された。

本格的な発掘調査は、昭和45年以後の下水道中央南幹線建設工事に伴う調査が最初であり、調査組織として新たに設置された瓜生堂遺跡調査会により以後の調査が行われた。この調査により、弥生時代中期の方形周溝墓が多数検出され、また引き続き実施された小阪ポンプ場増築に伴う調査やマンション建設に伴う調査でも全形を知ることができる方形周溝墓が多数検出された結果、これらの方形周溝墓は從来知られているものと違って高さ1m以上の盛土をもつこと、そして盛土内に木棺や土器棺など複数の埋葬主体をもつこと等が明らかになった。これらの調査結果は、弥生時代の社会や家族についての貴重な資料となるものであり、その後各地で発見される方形周溝墓の調査方法や沖積地に深く埋没した遺跡の調査方法を確立するもとなつた。その後、昭和49年から財団法人大阪文化財センターによって行われた近畿自動車道建設に伴う発掘調査では、調査規模が飛躍的に拡大し、方形周溝墓群の拡がりや住居跡が確認されるとともに、大阪湾型銅戈や鋳型片、豊富な木製品、土器・石器など弥生時代の生活内容が窺える大量の遺物が出土している。

これらの発掘調査によって確認された弥生時代の瓜生堂遺跡の範囲は、東大阪市瓜生堂、若江西新町、若江北町の一帯であり、遺跡北限は近鉄奈良線以南としてほぼ確定されるようになった。

その後、平成元年に近鉄奈良線北側の旧近鉄玉川車庫跡に大規模専門店(現近鉄ハーツ)が建設されることになり、事前に遺跡の有無を確認するための試掘調査が東大阪市教育委員会によって行われた。その結果、建物予定地をはじめ敷地の大部分においては沼沢地に堆積した植物遺体層や粘土層と砂層の互層が地表下4m以下まで続くことを確認したが、南端部の一地点においては弥生中期の遺物を含む層が地表下3.5mで検出され、瓜生堂遺跡の一部が近鉄奈良線の北にまで伸びることがはじめて確認された。

いっぽう、遺跡北西端においても、平成7年に財団法人東大阪市文化財協会によってマンション建設に伴う発掘調査が行われた結果、地表下2m前後の比較的浅い層準より弥生中期の方形周溝墓群が検出され、遺跡は北西部においても近鉄奈良線まで拡がり、さらに北にのびる可能性も示唆されるようになった。

平成2年12月～平成3年1月、大阪府教育委員会によって都市計画道路大阪瓢箪山線予定地の近鉄ハーツ南側においてあらためて遺跡の北限を確認するための試掘調査が実施された。調査は、鋼矢板で土留めした4m×4mの試掘坑4カ所を近鉄ハーツ前に等間隔に設定し地表下4.5mまで掘削精査された。その結果、最も東側の地点では、地表下3.5mで弥生時代中期の遺物包含層が検出され、さらに間層を挟んで地表下4.2mで弥生前期の遺物包含層も存在することが知られた。またこの地点のすぐ西の試掘坑では、地表下3.5mで弥生時代の方形周溝墓の一部が検出され、盛土上より供獻土器とみられる壺が1点出土したほか、上層の地表下1.5mでは中世の遺物包含層の存在も確認されている。これらの結果より、従前の遺跡北限範囲はさらに近鉄ハーツ南半部全域に拡大されることとなり、またその範囲はさらに東側に拡大する可能性も考えられるようになったのである。

平成8年度の試掘調査は、都市計画道路大阪瘋筆山線を若江岩田駅前再開発事業の工事用道路として使用するうえで、事前に遺跡の有無を確認しておく必要が生じたためにもちあがってきた。調査は東大阪市より東大阪市教育委員会に依頼があり、調査実施について協議を重ねた結果、財團法人東大阪市文化財協会に現地調査を委託して実施することとなった。この調査では、近鉄ハーツ東側から近鉄若江岩田駅西側までの延長約450mの区間に5カ所の試掘坑を設定し、先の大坂府教育委員会の試掘調査によって検出された弥生時代の遺物・遺構が今回の道路予定地に拡がっているかどうか、また古墳時代以後の未知の遺跡がないかどうかを確認することとした。そのため、弥生時代の遺構・遺物が検出される可能性が考えられる西側の2カ所については、鋼矢板で試掘坑の四周を囲んで土留めを行ったのち、弥生前期まで遺構・遺物の有無を確認するため地表下6mまでを掘削精査することとした。

いっぽう、東側の3カ所については、素掘りによって地表下4mまでを掘削し、いちおう弥生時代の遺物包含層の有無を確認することとしたが、調査確認の主眼は若江岩田駅の北東400mの市立岩田西小学校を中心に今回の道路予定地に隣接して拡がる岩田遺跡及び近隣の瓜生堂遺跡・若江等の遺跡と同様の中世の遺構・遺物が当該地に存在するかどうかについても調べることにあった。

岩田遺跡は、昭和48年に小学校が新設される際に東大阪市教育委員会の依頼を受けた東大阪市遺跡保護調査会によって確認調査が実施され、地表下0.5~1mより円筒埴輪片が多数出土するとともに、その上層より平安時代の土師器・黒色土器・瓦器・灰釉陶器などが出土したため、周知されるようになった遺跡である。この時出土した円筒埴輪は、外面をタテハケメ仕上げ、タガも突出の小さい6世紀前半のものである。当時、河内平野の沖積地に古墳の存在が知られていなかったために、これらの埴輪は古墳に伴うものとは考えられなかつたが、その後前記した近畿自動車道の調査において巨摩寺遺跡より一辺約15mの方墳の周濠が検出されたことから、岩田遺跡の円筒埴輪も墳丘を削平された古墳に伴うものである可能性が高いと考えられている。

また、付近に存在する式内社の石田神社の北側には昭和38年頃まで直径2mたらずの円錐形の小塚が水田の中にあって、東の塚を「幸神塚」といい、西の塚は「無名の塚」と呼ばれていた。さらに中河内郡誌には、ここを開拓した時、船によく似た大きな岩船があり、その長さは東塚から西塚に達し、全長50mちかくもあったという。これは古代大きな石の船がここで難破したもので、二つの塚はその前後のものと伝えられている。石田神社の社伝によると、欽明天皇の時代に岩船に祭神が降りて来たとされている。これら伝承は、いずれも石田神社付近に古墳が存在した可能性を示唆するものであろう。

奈良時代～中世の遺構・遺物についても、岩田遺跡のほか瓜生堂遺跡でも多数検出されている。瓜生堂遺跡では近畿自動車道関連調査や市立八戸ノ里東小学校予定地、府道中央環状線以東の下水道関連調査等で、掘立柱建物跡・井戸・溝などが地表下1m以内で検出されており、遺物では土器や瓦のほかに特に若江郡の郡衙がこの地にあったことを示す「若」と墨書きされた土師器片の出土が注目される。これらと同時期の遺構・遺物が今回の試掘地点においても検出される可能性は十分にあると考えられる。

以上のような目的を有する今回の試掘調査は、平成8年12月～平成9年3月に実施し、以下のような調査結果を得ることができた。



図1 試験地点位置図 (1/2,500)



図2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

2. 試掘結果

【A・B地区】

北辺と西辺に土層断面を観察するためのアゼを残し、現地表面より1mまでを機械掘削し、その後4mについて遺構・遺物の有無を確認しながら人力で掘削した。両地区的層位は基本的に対応する。

以下に各層の土色・土質を記し、土層断面の観察をもとに堆積状況に若干ふれながら、検出した遺構・遺物について述べることにする(図3)。

0.灰褐色シルト粘土層。古墳時代～近世の遺物が出土している。この層まで機械により掘削した。

1.5Y4/2灰オリ-シルト層。

2.5Y7/4浅黄色砂礫層。この上面でSE01・02・03を検出したが、実際にはさらに上方から掘りこまれていると考えられる。この砂礫層は南南東から北北西へ流れる河川の堆積と考えられる(図4)。弥生時代前期、後期、庄内式土器が出土している。弥生時代後期以降から氾濫と停滞を繰り返しながら陸化していくもので、若江遺跡などで中世の遺構面を形成する砂礫層と同じ堆積条件と考えられる。

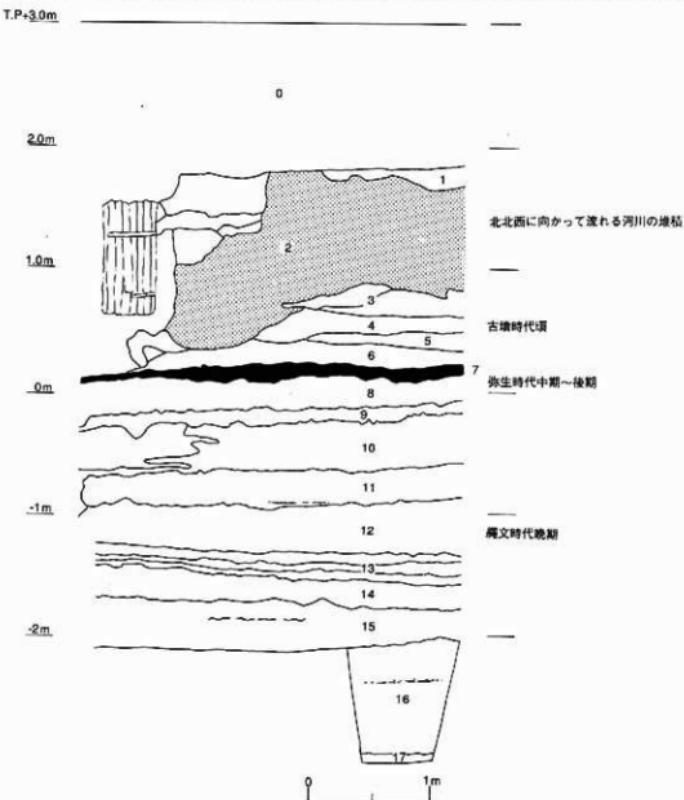


図3 A地区西壁断面図

A地区でS E01・02・03を同一面で検出した(図6・7)。現場ではS E01・02の切り合い関係が明らかではなかったが、出土遺物や井戸の形態からそれぞれ時期差が確認できた。またS E02を掘削中、S E02を造る際に切られたS E04を検出した。B地区でも井戸一基=S E05を検出した。

3.5Y6/4オリ-ブ黄色中粒砂～粗粒砂層。

4.5Y5/4オリ-ブ色粗粒砂～極粗粒砂層と5Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂層。古墳時代前期頃に溜まったものと考えられる。

5.2.5GY3/1暗オリ-ブ灰色粘土層。植物遺体を多く含む。以下無遺物。

6.2.5GY4/1暗オリ-ブ灰色粘土層。部分的にシルト～細粒砂がかむ。

7.7.5Y3/1オリ-ブ黒色シルト+粘土層。中粒砂混じる。植物遺体を多く含む。弥生時代中期に相当する層と思われるが、構造・遺物ともに確認できなかった。

8.5GY6/1オリ-ブ灰色細粒砂～礫層。

9.5GY4/1暗オリ-ブ灰色粘土層。植物遺体を多く含む。

10.5GY3/1暗オリ-ブ灰色シルト+粘土と細粒砂～中粒砂の互層。

11.2.5GY4/1暗オリ-ブ灰色粘土層。

12.2.5GY3/1暗オリ-ブ灰色粘土層。

13.2.5GY2/1黒色粘土層。

14.7.5Y4/1～3/1暗緑灰色粘土層。

15.5GY2/1オリ-ブ黒色粘土層。14.15には地震の痕跡が確認できる。

16.7.5Y3/2オリ-ブ黒色粘土層。植物遺体を多く含む。中粒砂～粗粒砂がかむ。

17.7.5Y4/1灰色極粗粒砂層。



図4 北北西に向かって流れる河川の堆積(↑)



図5 A地区西壁断面下部(→)

遺構と遺物

今回検出できた遺構は井戸のみである。

小都（1979）は井戸を以下のように定義している。

「井戸」—地下水を得るために掘った施設

井桁—井戸の地上部分・保護柵

井側—井戸の地下部分・井戸本体

井筒—井側の底に埋める取水あるいは浄水用の施設

なお、宇野（1982）は異なる名称を与えていた。今回検出した井戸については、井桁はいずれも残存しておらず不明であり、井筒についても井側的な要素をもつものがあり井側と井筒をはっきり区別できないため、井側の形態に着目することにし、各井戸とその出土遺物について述べる。



図6 S E01・02・03検出状況
(北から)

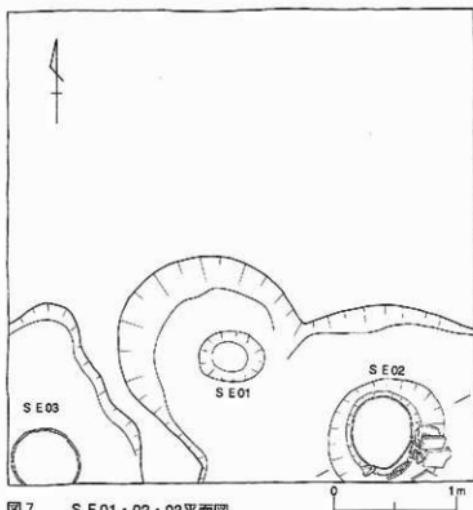


図7 S E01・02・03平面図

S E 01

直径50cm、深さ50cmの円形掘りかたの内部に曲物を一段残す。土師器皿は13~14Cのものが主体である。瓦器椀は、外面のヘラミガキは省略され、内面は圓線状の暗文を施している。S E 01底部付近から出土した完形の瓦器椀2点は口径10cm、器高3cm弱で、高台は消失している。また、常滑焼壺、青磁碗などいずれも14C前半に属する遺物が出土している（図8）。

S E 02（図10・11）

S E 01の掘りかたを切って造られている。掘りかたは調査区外へ広がるがおそらく円形と思われる。内部に瓦積みと曲物を残す。井側の上部40cm以上を瓦積みし、その下部には直径45cmの曲物を2段有する。瓦積みと曲物とは40cmの間隙があり、本来そこにも曲物が存在したと推測できる。

井戸内からほぼ完形の土師器皿が出土している。やや上げ底気味で14~15Cに比定できる。瓦質土器では甕、指り鉢、火舍など、遺物の中心が15C代前半に移る（図12）。

S E 03（図9）

掘りかたは調査区外へ広がる。桶を井側とする。直径約50cm、深さ約100cmを測る桶側は、幅6~7cmの板材を円形に組み、上下2カ所をタガで締める。タガには削り取った竹が使用されている。時期を限定できる遺物は出土していないが、桶を井側にする例は16C以降に多いことから今回検出した井戸の中では最も新しいものと考えられる。

S E 04

S E 02の検出作業中に検出した。S E 02によって上部をきられており、直径約40cmを測る曲物の一部のみを残す。遺物は出土しなかったが、切り合ひ関係からS E 02より古く、井側を曲物としている形態からみてS E 01に近い時期と推定したい。

S E 05

直径約50cmの円形のピットであるが、上部は削平された状態で、本来はもっと深さをもつことから井戸と判断した。曲物など井側は残存していなかった。12C代の平瓦が出土している。

集落における各時期の井戸の数や位置、使用期間、建造物との関係、地下水位など、考えなければならない問題は山積している。

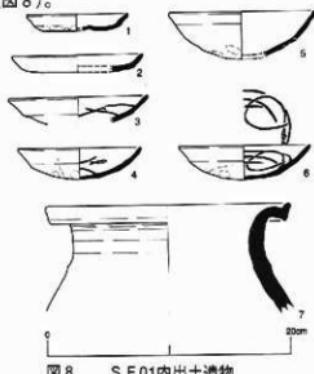


図8 S E 01内出土遺物



図9 S E 03（北東から）



図10 S E 02 (北から)

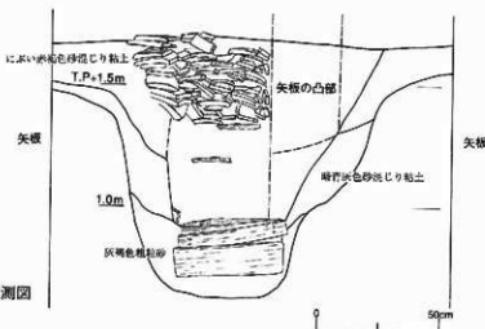


図11 S E 02実測図

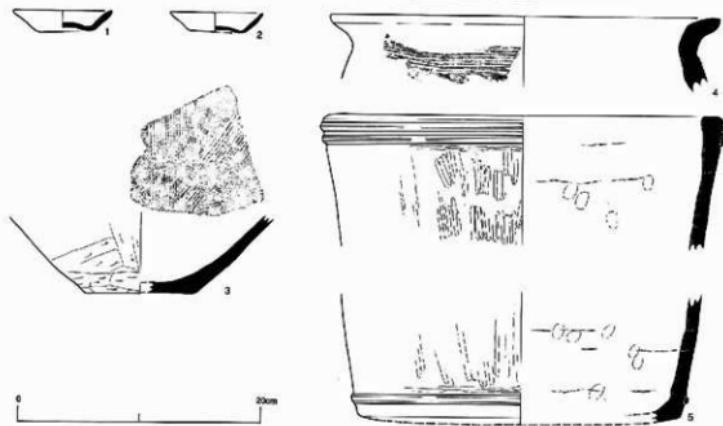


図12 S E 02内出土遺物

S E 02を形成する瓦について

瓦積み部分で取り上げたのは平瓦294点、丸瓦10点、不明瓦1点、須恵器1点である。削平等によりすべて取り上げてはいないが一応のデータになると考えられる。

まず、井側に使用した破片がどのくらいの割合で接合できるか、また、平瓦一枚に対してどのくらいの割合で接合できるかを試みた(図13)。接合関係が見られたのは全体の15%であったが、その内訳をみると、中には6点接合したものもあり、一枚の平瓦を打ち割って井側に使用したことが推察できる。次に瓦の大きさについてであるが、グラフを見てわかるようにタテ・ヨコともに10cm前後のものが多い(図14)。井側を造る際に、ある程度適した大きさを選択していたことが窺える。

これらの瓦は、軒丸瓦・軒平瓦から判断すると12C代に属するといえる(図15)。当時近隣に寺が存在したことが考えられる。井側として使用したのは、出土遺物から14~15C前半であり、その頃には寺は存続していなかったといえる。

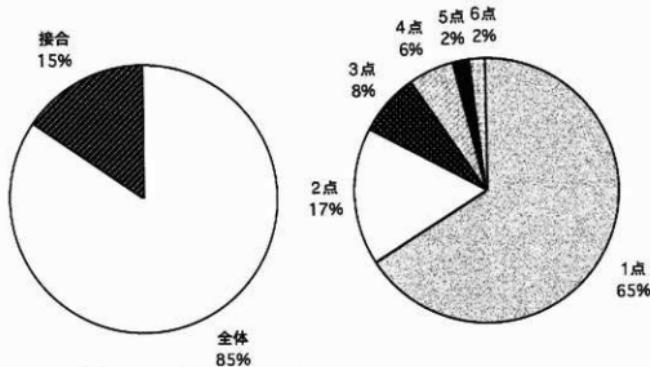


図13 S E 02に使用された瓦の接合状況とその内訳

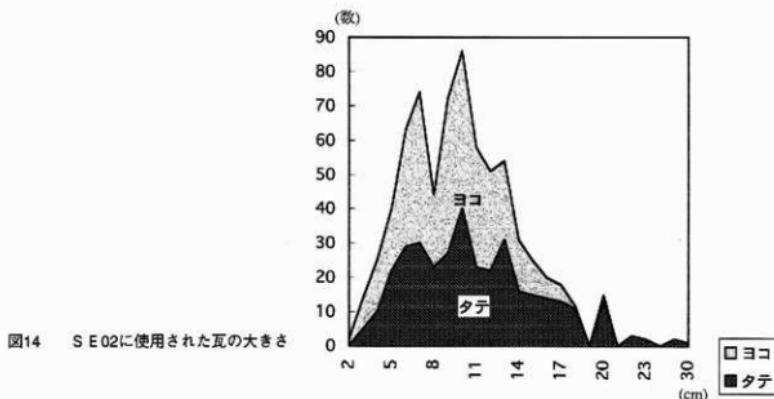


図14 S E 02に使用された瓦の大きさ

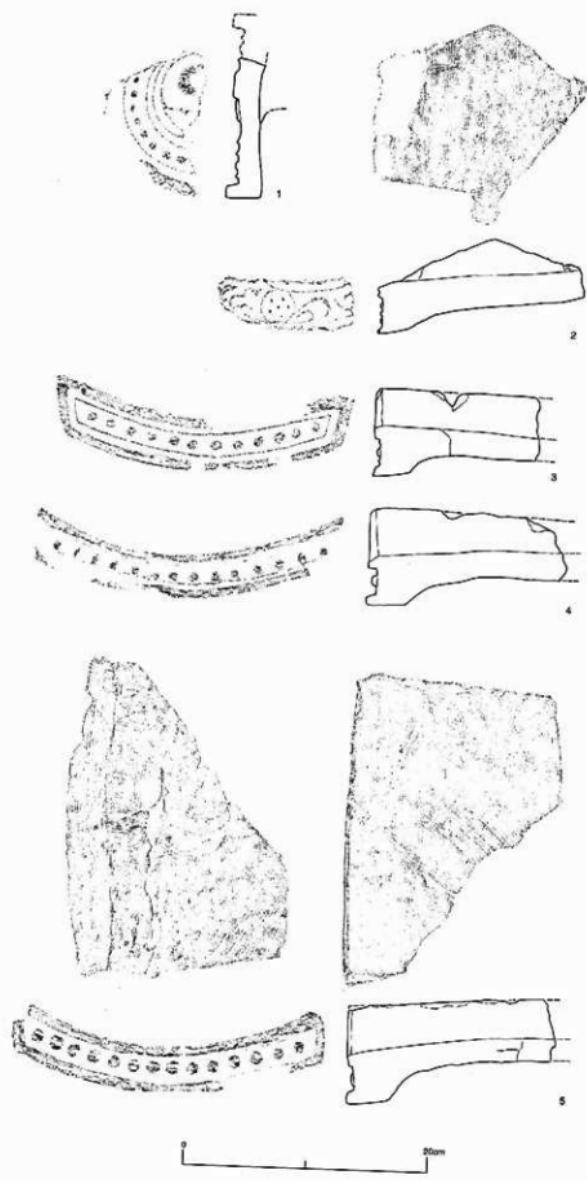


図15 S E 02の井側に使用された瓦

【C・D地区】(図16~20)

現地表面から約1mまでは盛土が堆積しており、機械によって除去した。以下、3mまで機械と人力を併用して掘削し、土層断面の観察をおもにおこなった。

0.盛土

- 1.2.GY3/I暗オリーブ灰色粘土層。粗粒砂を含む。
- 2.2.GY4/I暗オリーブ灰色粘土層。粗粒砂を含む。鉄分沈着。
- 3.7.GY4/I暗緑灰色粘土層。鉄分沈着。根跡が多くみられる。
- 4.GY5/Iオリーブ灰色シルト+粘土層。根跡が多くみられる。
- 5.10GY4/I暗緑灰色中粒砂～粗粒砂層。
- 5-1.7.GY4/I暗緑灰色シルト+粘土層。
- 5-2.10GY4/I暗緑灰色シルト+粘土層。
- 5-3.10GY5/I暗緑灰色シルト+粘土層。
- 6.10G3/I暗緑灰色粘土層。鉄分沈着。
- 7.GY3/I暗緑灰色シルト+粘土層。
- 8.5G3/I～4/Iシルト+粘土と中粒砂～粗粒砂の互層。
- 9.10Y6/I灰色中粒砂～細礫層。
- 10.7.Y3/2オリーブ黒色粘土層。植物遺体を多く含む。

以下、1mまで緑灰色シルト+粘土層。

C・D地区はA・B地区とは異なる堆積状況を示していた。A・B地区において中世の造構面を形成する砂礫層の堆積がなく、湿地を示す粘土層が1m近く堆積しており、また、2～4層には鉄分や根跡が多くみられることから、水田耕作上あるいはハス田としての利用が考えられる。

【E地区】

現地表面から2mまでを対象とし、機械と人力を併用しておこなった。アスファルト舗装の下は搅乱土が厚く、掘削予定の2mを越えて続いている。部分的に搅乱土を深掘りしたところ、ヘドロ状の堆積物が現れたため、この地は池跡と判断した。遺物は出土しなかった。

3.まとめ

今回の試掘では、A・B地区において一段目のキリバリまでを機械で掘削したため、上層の造構を削平するなど反省すべき点が多い。

A・B地区において、弥生時代中期の造構面は確認できなかったが、面的な調査をおこなえば、府教委の試掘で確認されている方形周溝墓の終焉がおさえられるものと思われる。

C・D地区の範囲ではハス田がおこなわれるような湿地帯であった。耕作に伴う造構が存在するはずである。

井戸内から円筒・衣壺・盾型埴輪などの破片が出土していることから、近隣に古墳が存在すると考えられる。

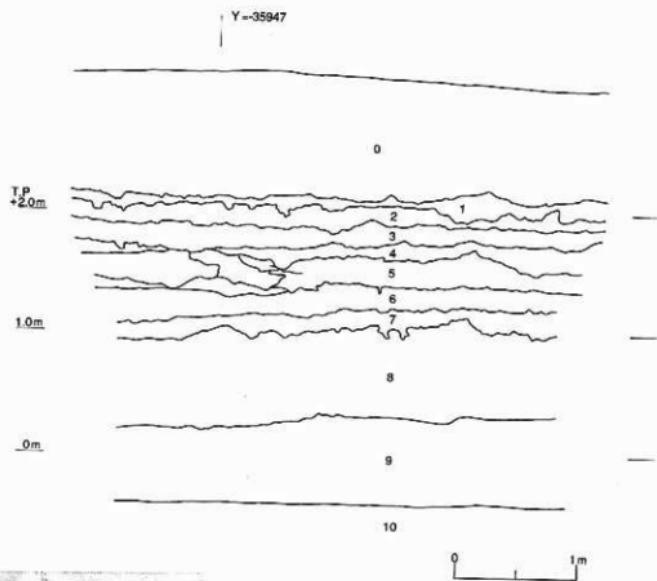


図16 C地区北壁断面図

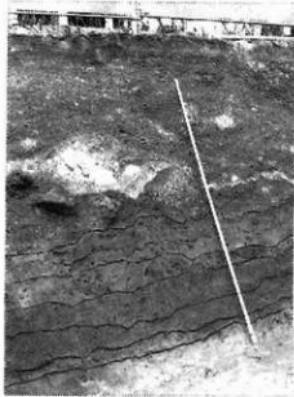


図17 C地区西壁断面(↑)

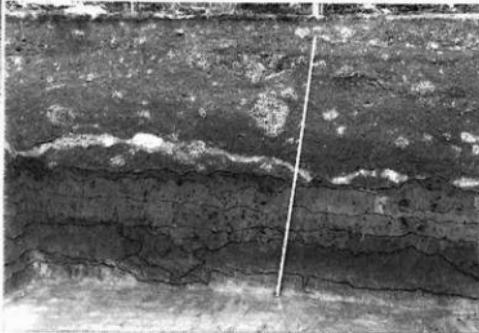


図18 C地区北壁断面(→)

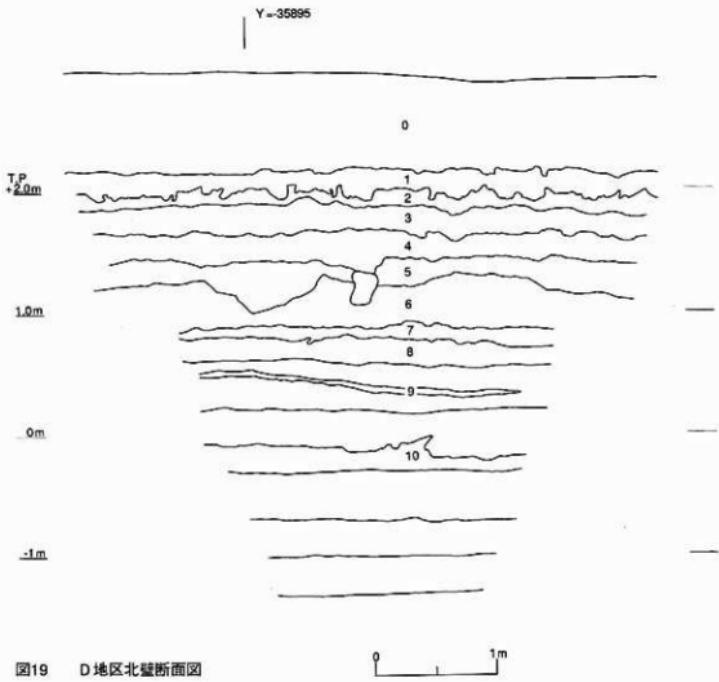


図19 D地区北壁断面図



図20 D地区作業風景 (南東から)

報告書抄録

ふりがな	うりゅうどういせき						
書名	瓜生堂遺跡試掘調査報告書						
副書名	都市計画道路大阪瓢箪山線の建設事業に伴う瓜生堂遺跡第44次調査						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	茅本隆裕・三輪若葉						
編集機関	財団法人 東大阪市文化財協会						
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21						
発行年月日	平成9年3月21日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査要因
35°49'54.123 瓜生堂遺跡 (第44次調査)	大阪府 東大阪市 西岩田1丁目 外	27227	34° 39' 40"	135° 35' 20"	平成8年12月 平成9年3月	107	道路建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落跡	室町時代	井戸	土師器・瓦器 瓦・埴輪 木製品	・中世遺構検出により瓜生堂遺跡の範囲が東へ拡大			

瓜生堂遺跡試掘調査報告書

1997. 3. 21

発行 財団法人 東大阪市文化財協会
印刷 株式会社 ドウミ印刷広研社